

【浅井恵倫先生語録】

そもそも世の先学相承血脉する大学の本意といふはあながちに栄華
栄耀を好み一生を心安く過すところの名利勝他の義にはあらず只も
ろもろの人とともにあまねく学を求むる行者となりて一人たりとも
真理を求むる輩を繁昌せしむるやうあれかしというばかりよりは更
にあるべからず候 然れば今や門を出づる輩一同は学問を堅固の思
ひより油断あるべからず候在所にありても学問の本意たがうべから
ずしばしば會合をいたし学不学を沙汰し或は懈怠の人あらば諭すべ
きものなり 今はいにしへよりまれなる昇平の時にあひ国恩のかた
じけなきことを知り王法をもて本とし仁義を先として国の民として
疎略の義ゆめゆめあるべからず別してとつ国の人には非義の次第是
なく平和の世界によくよく心うべし かく行住坐臥をえらばず学の
道をいそしみ人の道をふみなば彼岸に達すること疑ひあるべからず
あなかしこあなかしこ

昭和四十一年三月二十一日

釋 恵 倫

* 佐藤注

この一文は、南山大学院で浅井先生より言語学を学んだ卒業生・
在校生によって結成された集いのための連絡報として作られた
「ウサギ小屋便り、一号」に寄せられたものである。

卒業後もこの一文についての記憶が鮮明に残っていたのだが、
なかなか探すことが出来なかったが、古い手紙・書類を整理し
ていたところやっと見つけることができた。1966年に書いた
ことになるので、37年目にして再会したことになる。

記憶が薄れていたがこの一文にまためぐり合えることが出来た
のも、“彼岸に達する”ための一助となるであろう。

《注：とつ国＝外・国＝日本以外の国の意》

2004年8月20日記